

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

| | | | |
|---------|----------------------|------------|-------------|
| 事業所番号 | 0991300096 | | |
| 法人名 | 株式会社 TAKK | | |
| 事業所名 | 認知症高齢者グループホーム さくらハウス | | |
| 所在地 | 栃木県那須塩原市高林1931番1 | | |
| 自己評価作成日 | 平成30年9月17日 | 評価結果市町村受理日 | 平成30年12月28日 |

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

| | |
|----------|---|
| 基本情報リンク先 | http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php |
|----------|---|

【評価機関概要(評価機関記入)】

| | |
|-------|--------------------|
| 評価機関名 | 特定非営利活動法人アスク |
| 所在地 | 栃木県那須塩原市松浦町118-189 |
| 訪問調査日 | 平成30年10月22日 |

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

家庭的な雰囲気の中で「笑顔のあふれる暮らし」の理念の下、職員も笑顔で過ごし寄り添うことで、入居者の笑顔を引き出している。心身機能が低下し「したいこと」を確認しにくくなっているが、天気の良い日には庭に出て散歩をしたり、ゆっくり昔話を聞ける時間を設け、穏やかに日々を過ごせるよう関わっている。言葉数が減ってしまった方に対しても、急かさずゆったりと過ごせるよう努めている。近隣との交流は少ないが、近くの小学校との交流会や、中・高校生のボランティアの受け入れ、地域の方々の慰問などでかわりを持っていく。開所から7年が経過し、入居当初は自分で歩いていた方も車いすの生活となり過ごし方も変化してきている。終末期をどう過ごしたいか、どう過ごしてもらいたいかなどご家族と話し合いを重ねながら、意向に沿えるよう対応させて頂いている。災害時に備えた避難訓練も、移動時間を計測しながら行うなど実践的な訓練を実施できている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

理念である「笑顔があふれる暮らし」を実践するため、職員は笑顔でいることが利用者の笑顔につながることを理解して、常日頃明るい気持ちで生活をし気持ちに余裕を持って支援するように心掛けている。管理者は、利用者が穏やかにそれぞれのペースで職員と共に暮らせる場所になる様に常に職員に伝えており、職員は利用者の表情から思いを読み取り、そっと見守りながら支援している。職員は、利用者一人ひとりが不快な気持ちや不穏にならないように否定の言葉は使わないなど、声の掛け方や声のトーンにも配慮している。また、本人の意向を確認して必要な支援を常に模索しながら行い、できることは見守りで対応している。食事の介助が必要な人にもその人の残存機能を活かした支援をしている。食事の準備から食後まで職員の適切な言動が利用者の穏やかな食事風景を作っている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

| 項目 | 取り組みの成果 ↓該当するものに○印 | 項目 | 取り組みの成果 ↓該当するものに○印 |
|----|--|----|---|
| 56 | 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25) | 63 | 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19) |
| 57 | 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38) | 64 | 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20) |
| 58 | 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38) | 65 | 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) |
| 59 | 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37) | 66 | 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12) |
| 60 | 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49) | 67 | 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う |
| 61 | 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31) | 68 | 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う |
| 62 | 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28) | | |

自己評価および外部評価結果

| 自己 | 外部 | 項目 | 自己評価 | 外部評価 | |
|--------------------|-----|---|--|--|-------------------|
| | | | 実践状況 | 実践状況 | 次のステップに向けて期待したい内容 |
| I. 理念に基づく運営 | | | | | |
| 1 | (1) | ○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている | 法人理念の下、グループホーム独自の理念「笑顔があふれる暮らし」を共有し、入居者は勿論、私達職員自身も笑顔で過ごせるように実践している。 | 「笑顔があふれる暮らし」が理念である。職員は笑顔でいることが利用者の笑顔につながることを理解して、毎日頃明るい気持ちで生活をし余裕を持って支援することを心掛けている。管理者は、利用者が穏やかにそれぞれのペースで職員と共に暮らせる場所になる様に願い常に職員に伝えており、職員は利用者の表情から思いを読み取り、そっと見守りながら支援している。 | |
| 2 | (2) | ○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している | 地域の小学校との交流会、中・高校生のボランティアサマースクール・マイチャレンジの受入等も実施し高齢者との交流を支援している。昨年7月には、自治会長の協力の下、避難訓練を実施し地域の公民館へ実際に移動させて頂いた。 | 小学校との交流会では授業の一環として子どもたちが訪問し演奏や歌を披露してくれる。中高生のマイチャレンジでは同じ生徒が継続してくれて子どもの成長を共に喜んでいる。またレクリエーション協会に月一度継続的に慰問に来てもらい、手品やゲームを楽しみ、歌を歌う利用者の嬉しそうな顔を見る事ができる。 | |
| 3 | | ○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている | 小学校との交流会や、中・高校生ボランティアサマー等で、認知症を有していても会話やレクを楽しめたり、昔の知恵を教わることができ、尊敬する大先輩であることを伝えている。 | | |
| 4 | (3) | ○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている | 民生委員や自治会長の出席率が高いが、家族の出席は少ない。2か月の1度発行している「さくらハウス便り」に前回の運営推進会議の内容を載せ取組をアピールしている。 | 生活圏域にある同じ法人の地域密着型特別養護老人ホームと、グループホームに併設している小規模多機能型居宅介護事業所と合同で運営推進会議を開催し、民生委員、自治会長、地域包括支援センター職員、市職員、家族が参加している。事業所の現状報告後、感染症予防や薬についての薬剤師の話、高齢者の筋力アップなどテーマを決めての講義は参加する人の学習にもなっている。利用者家族の参加者が少しでも増えるように、家族の来所時や「さくらハウスだより」で声掛けに努めている。 | |

| 自己 | 外部 | 項目 | 自己評価 | 外部評価 | |
|----|-----|---|--|--|---|
| | | | 実践状況 | 実践状況 | 次のステップに向けて期待したい内容 |
| 5 | (4) | ○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる | 市町村との連携はとれている。 | 怪我や事故などがあった場合は利用者の状況を市担当者に連絡し相談することがあるが、困難事例を市から依頼され事業所として対応したこともある。市担当者の移動が多いので関係性を築くのがなかなか難しい現状になっている。 | 家庭での虐待や困難事例に関して事業所だけで支援するには限界がある場合、行政の支援が必要となるが、行政の縦割りに苦慮することになる。支援が一つの課や係で完結しない場合を想定し、市町村との連携方法について確認しておくことも必要となる。 |
| 6 | (5) | ○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる | 身体拘束をしないケアを心がけてはいるが、介助が重なる時や繰り返しの訴えに対して「ちょっと待っててください」等のスピーチロックはある。玄関の施錠はせず、職員の付き添いで散歩に出かけたり玄関周りの掃除も入居者と共に行っている。ベッドからの転落時の怪我等に備え、ベッド下に布団を敷き対応している。忙しい時間帯に手薄にならないようなシフト調整も行っている。 | 言葉かけで「スピーチロック」にあたるか職員同志で確認しあったり、利用者の表情を読み取りながら利用者が不快な気持ちや不穏にならないように心がけている。管理者は、職員が利用者の行動を抑制したり、気持ちを押さえることがないように注意を払い、気になる対応にはその都度注意を促している。 | |
| 7 | | ○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている | 高齢者虐待マニュアルを参考に定期的にミーティングを行っている。入居者の全身状態の観察を行いアザ等の確認と、精神状態の変化を見過ごさないよう職員間の連携を図っている。職員の精神的な変化にも気づけるよう、個人面談も行っている。 | | |
| 8 | | ○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している | 運営推進会議の議題に取り上げたり、勉強会の中で学ぶ機会を設けている。今後も継続的に学習していく。 | | |
| 9 | | ○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている | 契約時に説明し、不安等への対応も行っている。入居してから新たに出てきた疑問点に関しても、その都度対応できるようにしている。 | | |
| 10 | (6) | ○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている | 運営推進会議への家族の参加は少なく、面会時に状況報告をしながら要望等を伺えるよう努めている。入居者本人の要望等の確認も中々出来ない状況。 | 職員は、家族が面会や通院の付き添いに訪れた時に利用者の生活の様子や体調を伝え、家族の率直な気持ちを話せるように配慮している。思いや意見を上手に表せない利用者には、嫌なこと、好きなことを職員が表情から気持ちを汲み取るように努めている。 | |

| 自己 | 外部 | 項目 | 自己評価 | 外部評価 | |
|------------------------------|-----|--|--|--|-------------------|
| | | | 実践状況 | 実践状況 | 次のステップに向けて期待したい内容 |
| 11 | (7) | ○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている | 職員全員が集まれる機会は無いが、数人でのミーティングの中でケアに関することや業務に関する話を話している。 | ミーティング時やそれ以外の場でも、利用者の様子やケアの方法、居室や共有空間の衛生面、物品の保管場所など、職員同志で気になることを気軽に意見を出し合い話し合える環境になっている。職員のシフトはみんなで協力しあって調整している。 | |
| 12 | | ○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている | 個別面談の機会を設け意向の確認をしている。 | | |
| 13 | | ○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている | 法人内外の研修受講に関して前向きに検討し、働きながら職員同士での学びの機会を設けている。 | | |
| 14 | | ○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている | 同法人の別事業所との交流を持てるようにしている。 | | |
| II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援 | | | | | |
| 15 | | ○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている | 入居前にご本人の好みや不快に思うことを確認し過ぎしやすくできる工夫をしている。 | | |
| 16 | | ○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている | ご家族の困りごとや不安に関して傾聴し、要望に関して出来る限り対応できるよう心がけている。 | | |
| 17 | | ○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている | ご本人とご家族のニーズを見極め対応できるよう他施設への申請やサービスの説明もしている。 | | |

| 自己 | 外部 | 項目 | 自己評価 | 外部評価 | |
|------------------------------------|-----|---|--|---|-------------------|
| | | | 実践状況 | 実践状況 | 次のステップに向けて期待したい内容 |
| 18 | | ○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている | 入居者それぞれの体力や能力の差はあるが、その方が出来ることを継続できるよう、集団生活では無く、共同生活を送れるようにしている。 | | |
| 19 | | ○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている | 可能な限り、通院はご家族で行って頂くことでご本人の状態を把握し支える関係の共有を図っている。ご家族が来所時には日頃の様子を報告し毎月の行事等での様子をスナップ写真と共に文書にして送付している。 | | |
| 20 | (8) | ○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている | ご家族と一緒にドライブに出かける入居者もいるが、身体機能の低下に伴い出かけられる頻度も場所も減っている。小規模多機能事業所の利用者との交流は見られるが、声をかけられれば会話できる程度となっている。 | 気分転換のため、定期的に息子さんと外出する人、入居前から通っていた教会に入所後も送迎してもらいながら1週間おきに通い、信者仲間との交友関係を続けている人、理容師の家族に髪のカットで訪問してもらう人など、馴染みの関係が続いている利用者がいる。 | |
| 21 | | ○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている | その時々状況に合わせ、入居者同士で会話が出来たり、職員が橋渡しをして会話を楽しむことがある。 | | |
| 22 | | ○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている | 入院時や他施設への入居当初はご家族の不安もあるため、随時相談等の対応を行う。 | | |
| Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント | | | | | |
| 23 | (9) | ○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している | 意思疎通の困難な入居者が多くなっているが、座ったまま洗濯物を畳んで頂いたり、元気な方にはテーブル拭きや食器拭き、玄関掃除など職員と一緒にやっている。 | 職員は利用者の体調や表情を見て気持ちを汲み取るように心がけている。寂しそうな表情の時は、気を紛らわせるように興味のあることに誘導したりお茶に誘ったりしている。また利用者がひとりで行おうとしていることは職員が安全に配慮しながら見守り、利用者の意思を尊重するようにしている。 | |
| 24 | | ○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている | ご家族やご本人から、生活歴や今までの環境、趣味などの情報を得ている。 | | |

| 自己 | 外部 | 項目 | 自己評価 | 外部評価 | |
|----|------|--|--|--|--|
| | | | 実践状況 | 実践状況 | 次のステップに向けて期待したい内容 |
| 25 | | ○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている | 個別ケアを中心に、一人ひとりの一日の流れを把握し、心身状況の変化に対応できるよう努めている。 | | |
| 26 | (10) | ○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している | 介護計画は、日々の申し送りやミーティングで現状や困難事項について話し合い情報を共有しながら作成している。継続的に必要なケアや対応の変更が必要な事柄についても相談しながら実践できるようになっているが、十分なモニタリングには至っていない。 | 入居時は、今までのケアマネジャー等の情報やかかりつけ医の意見を参考にし、家族からは利用者の今までの生活や体の様子を聞き取り、介護計画作成担当者がケアプランを立てている。退院後など状態が変化した時は、職員みんなに利用者の様子を聞き取りながら意見交換をし、少しでも穏やかに生活できるよう介護計画に反映させる見直しをしている。 | 利用者の変化が把握しやすく介護計画に連動したモニタリング様式などを工夫し改善することを期待する。 |
| 27 | | ○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている | 業務日誌、申し送りノートを活用し職員間での情報共有はできている。 | | |
| 28 | | ○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる | ニーズや状態の変化に伴い、他施設への検討や、医療との連携も図れるよう往診の依頼等も行っている。 | | |
| 29 | | ○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している | 地域の小学校との交流会や、中・高校生との関わり、ボランティアの慰問、蕎麦打ち等を実施し社会交流の機会を設けている。 | | |
| 30 | (11) | ○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している | ご家族の協力を得ながらかかりつけ医への受診を行っている。細かい情報が必要な場合は日々のバイタル・排泄・水分摂取状況を記入し主治医へ情報提供している。家族対応での受診が困難な場合は職員が対応し、通院が難しくなってきた方には往診も依頼している。 | かかりつけ医への受診は家族が付き添うことを基本としているが、法人の関連病院への受診は職員が通院介助を行う場合がある。通院が困難になった場合はそこからの訪問診療・往診を利用する人もいる。受診に必要な情報は家族に伝え、家族からは受診報告を受け、申し送り事項として業務日誌に記入して職員で共有している。 | |
| 31 | | ○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している | 非常勤の看護職員や、医療保険で必要時に来て頂いている訪問看護師に相談し対応している。 | | |

| 自己 | 外部 | 項目 | 自己評価 | 外部評価 | |
|----------------------------------|------|---|---|--|--|
| | | | 実践状況 | 実践状況 | 次のステップに向けて期待したい内容 |
| 32 | | ○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係 | 入退院時には病院関係者との情報交換を行っている。 | | |
| 33 | (12) | ○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる | 入居時に、重度化したり終末期の意向をご家族に確認し、看取りに関してはまだ完璧に行える状況ではないことを伝え、事業所として出来ることを説明している。体力が低下し往診が必要となった時点で再度意向を確認し、意向に沿って対応している。 | 重度化した場合や終末期のあり方を入居時に説明している。入居後の状況変化に応じて、延命治療を望むか家族に再度確認している。現時点では看取りが十分に行える体制ではないが、医療との連携ができ、家族の理解と同意があった場合、本人にとっての負担を考えて看取りをする可能性は否定していない。家族の意向に添った終末期のあり方を探っている。 | |
| 34 | | ○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている | 緊急時の連絡体制は整えている。入居者の状態を把握し急変時の対応が出来るよう情報の共有を行い備えている。 | | |
| 35 | (13) | ○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている | 年2回の避難訓練を実施している。1回は消防署立会いで行い、昨年の訓練では自治会長の協力の下、公民館への避難を実施したり、川の氾濫を想定し、近隣施設へ車で避難し所要時間の計測を行った。 | 避難訓練では、年2回のうち1回は消防署立ち会いで総合訓練を行い、もう1回は事業所独自で行うことになっている。薬や緊急連絡先等ファイルを避難時に持ち出すことが決められている。有事の避難先は同じ地域の同法人の施設となっているが、昨年の避難訓練では施設の脇を流れる川の氾濫を想定し、自治会長の協力ですぐの自治公民館への避難を試みている。 | 昨年の避難訓練で、同法人の施設や地区の自治公民館への移動時間を把握できたが、車を使つての移動に時間がかかることが課題となった。課題となった車による移動手順について、具体的な対策を検討することが望まれる。また、法人として作成した各種災害対策マニュアルをさくらハウスの実状に合わせて見直す必要がある。 |
| IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援 | | | | | |
| 36 | (14) | ○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている | 個人を尊重し、その時々の変化などに気をつけながら言葉かけや対応を行っている。 | 職員の声掛けの仕方では利用者の表情が変わると認識して、否定の言葉は使わないなど声の掛け方や声のトーンにも心配りしている。そのため、居間で過ごす利用者の表情は穏やかである。排泄介助時の汚物の処理、トイレや風呂のドアの開閉等プライバシーへの配慮を欠かさない支援を心掛けている。また、本人の意向を確認してその意向に沿った支援を行い、できることは見守りで対応している。 | |

| 自己 | 外部 | 項目 | 自己評価 | 外部評価 | |
|----|------|---|---|--|-------------------|
| | | | 実践状況 | 実践状況 | 次のステップに向けて期待したい内容 |
| 37 | | ○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている | ご本人の思いや希望を表現し易いように、傾聴しながら言葉を引き出せるように寄り添っている。失語がある方でも、こちらから誘導するのではなく、選択できるような言葉かけを行い思いを表現できるようにしている。 | | |
| 38 | | ○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している | 一人ひとりのペースを大切にし、起床時間や就寝時間、排泄の決まりも無く過ごして頂いている。 | | |
| 39 | | ○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している | 好みの服を選んで着たり、2ヶ月に1度は、事業所に来てくれる理美容の方に散髪してもらっている。 | | |
| 40 | (15) | ○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている | 身体状況が悪化している入居者が多く、一緒に何かを行える機会は減っているが、数人の入居者は下膳、台拭き、食器拭き等を職員と一緒にやっている。 | 利用者の食べ物の好き嫌いは少ないが、献立の彩りや食べやすいように調理上の工夫をしている。できるだけ自分で食べることができるよう、食事の介助が必要な人にもその人の残存機能を活かした支援をしている。食事の準備から食後まで職員の適切な言動が利用者の穏やかな食事風景を作っている。 | |
| 41 | | ○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている | 一人ひとりに適した量を配膳し、栄養バランスも考慮した献立になっている。摂取量や水分量のチェックも行い管理している。 | | |
| 42 | | ○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている | 拒否や抵抗がある場合は無理強いせず、出来る限り毎食口腔ケアを行い、義歯や口腔内の状態を確認している。 | | |

| 自己 | 外部 | 項目 | 自己評価 | 外部評価 | |
|----|------|---|--|--|-------------------|
| | | | 実践状況 | 実践状況 | 次のステップに向けて期待したい内容 |
| 43 | (16) | ○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている | 一人ひとりの排泄パターンを把握しトイレ誘導している。訴え時には都度対応し、立位が保てない入居者のみオムツ使用となっている。夜間は、入居者の動きに対応しトイレでの排泄を実施している。 | 排泄チェック表や水分チェック表から排泄のパターンを把握して、余裕の持てる声掛けのタイミングでトイレに誘導し、排泄の失敗を防いで、不快と感じることがない支援に努めている。頻繁に「トイレ」と言う利用者を制止して待たせることも虐待と捉え、直ぐに対応することを心掛けている。他の利用者を介助していて直ぐに対応できない場合でも声掛けの工夫でしのいでいる。夜間も利用者の気持ちを尊重しトイレでの排泄に対応し、排泄の自立支援を行っている。 | |
| 44 | | ○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる | 水分摂取や適度な運動、必要時には便秘薬を使用し排便を促している。 | | |
| 45 | (17) | ○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている | 午後に入浴の時間を設け、一人の職員が準備、着脱、入浴、髪乾燥まで全て行い、その方に合った時間配分で支援している。 | 脱衣所は床暖房が整備され、浴室には機械浴、浴槽壁の高低が可動調節できる個浴槽が設置されている。午前中は併設する小規模多機能事業所の利用者が使用し、グループホームの利用者は午後入浴している。立位の保てない全介助の場合は機械浴を利用するが、それ以外は職員が一对一で安全に配慮された個浴槽での入浴に対応している。入浴を拒否する人もいるが声掛けの工夫で入浴へ誘導している。入浴日と時間帯は決めているが、長くゆっくり入浴したいとの個人の希望は叶えている。入浴に関する対応等は業務日誌に記され、清潔保持の確認に利用している。 | |
| 46 | | ○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している | 部屋の温度や明るさの調整を行い、一人ひとりの就寝のタイミングに合わせている。巡視時には睡眠の妨げにならないよう配慮している。 | | |
| 47 | | ○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている | 薬事情報を確認し、全職員が把握に努めている。服薬の準備も全職員が責任を持ち準備し、症状の変化等への観察も行っている。 | | |

| 自己 | 外部 | 項目 | 自己評価 | 外部評価 | |
|----|------|--|---|---|-------------------|
| | | | 実践状況 | 実践状況 | 次のステップに向けて期待したい内容 |
| 48 | | ○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている | 掃除、食器拭き、テーブル拭き、洗濯物たたみ等それぞれに合った役割を作り行ってもらっている。 | | |
| 49 | (18) | ○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している | 身体的な衰えとともにご家族との外出の機会も減っている。季節毎の外出も計画しているが、なかなか実行できなくなっている。庭の花々を眺めたり、散歩するなどの気分転換は日常的に行っている。 | 桜の花見、新緑、紅葉など季節が感じられる外出を企画しているが、身体機能が低下する利用者が増え、日常的な外出の機会は少なくなって来ている。家族との外出や外泊をする人も少なくなっている。それでも車いすで天気の良い日には敷地内を散歩して、隣接する一面真っ白になる蕎麦畑や那須連山を眺めたりしている。外出が困難となった利用者はレクリエーションなどで楽しんでもらっている。 | |
| 50 | | ○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している | 金銭管理は事業所で行い、本人には現金は渡していない。 | | |
| 51 | | ○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている | 以前は手紙の支援も行っていたが、現在は書く行為が難しくなっている。 | | |
| 52 | (19) | ○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている | 共用のホールからは、庭の草花やそば畑を眺めることができ、鳥たちの姿や鳴き声も感じられる。テーブルや席の配置にも配慮している。隣の和室ではソファーに腰掛けテレビを見られる場所となっている。 | 食堂を兼ねた居間や廊下、脱衣所は床暖房で冬場の温度差を無くし、居間の高い天窓は寒冷紗で夏場の強い日差しを防いでいる。施設全体は明るく、システムキッチンに立つと利用者の様子が見渡せる造りとなっている。利用者のほとんどは居間にいることが多く、ぬり絵をしたり雑誌や昔の写真を眺めていることが多い。居間と続きの段差のない和室は、小規模多機能事業所の利用者と一緒に行う行事にも活用されている。 | |
| 53 | | ○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている | 居室とホールを自由に行き来し、横になったり雑誌を眺めたり、塗り絵を楽しむことができる。 | | |

| 自己 | 外部 | 項目 | 自己評価 | 外部評価 | |
|----|------|---|---|--|-------------------|
| | | | 実践状況 | 実践状況 | 次のステップに向けて期待したい内容 |
| 54 | (20) | ○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている | 家族やペットの写真を飾ったり、好きなぬいぐるみをベッドに置き一緒に眠っている方もいる。好みの物を持ち込んで頂けるようご家族にも勧めている。 | 利用者が混乱しないように個室のドアには名前が貼ってある。室内には洗面台が備え付けられ、持ち込んだベッドや衣装ケースが置かれている。ぬいぐるみや写真を飾っている部屋もあるが、余分なものを持ち込んでいない部屋もある。それはここが仮の住まいで帰るべきは自宅であると思っている人への配慮で、あえて家で使っていた物を持ち込まないのも支援として、利用者それぞれが居心地良く過ごせることを優先している。 | |
| 55 | | ○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している | トイレの表示や居室のドアにネームをつけて分かりやすくしている。目の不自由な方には分かりやすいように大きな飾りをつけている。 | | |